

## 『公害・環境研究のパイオニアたち』を読む

表題と写真は岩波書店から9月10日に出版された本である。宮本憲一先生の784ページの大作『戦後日本公害史論』を読んで、公害・環境研究の歴史にあらためて興味を持ったので、すぐさま手に取った。副題の公害研究委員会は、公害・環境問題の学際的研究組織として1963年に発足した。当初は「7人の侍」であった。

本書の目次は、総論「日本の公害の歴史的教訓」（宮本憲一）と人物編ⅠとⅡからなる。人物編Ⅰ「公害・環境研究の礎となった先人たち」として、都留重人・庄司光・戒能通孝・鈴木武夫・四手井綱英先生の5人を取り上げる。人物編Ⅱ「公害・環境被害の現実と向き合った人々」として、田尻宗昭・清水誠・宇井純・原田正純・飯島伸子・華山謙・秋山紀子先生の7人を取り上げている。第一線で活躍される先生たちの研究、「人間味」が伝ってくる。

古くから『公害研究』（現在の『環境と公害』）を愛読し日本環境会議（JEC）の会員でもあるので、本書で紹介されている12人の先生、「公害・環境研究のパイオニア」には、なんだか親近感を感じる。

「公害の政治経済学」の創立者都留先生には、大学時代から多くのことを学んできた。都留先生は旧制第八高等学校、現在の名古屋市立大学の滝子キャンパスに進学したが、治安維持法「改正」による大検挙で八高を除名となった。この3月まで滝子キャンパスで過ごした頃を思い出す。「生活科学としての環境衛生学の創立者」庄司先生も、大阪での浪人から大学院時代の頃が思い出される先生である。

もっと親近感がある先生が、宇井先生と原田先生である。この本の「公害研究委員会50年余の歩み」にも記されているが、1999年3月に第18回日本環境会議が名古屋で開催された。大会事務局長の「大役」をまかされ、慣れないので苦勞の連続であった。大会前日に恒例の「現地視察」を企画し、長良川河口堰見学を担当した。会場の準備を終えて名駅西口に行くと、宇井先生が道端に座って待っておられたのを記憶している。原田先生も時間通りに集合され、マイクロバスで長良川河口堰に向かった。最初はやはり緊張したが、すぐに温かさと人間味を感じた。

宇井先生には、翌年の第19回日本環境会議東京&川崎大会の分科会で、司会を一緒にさせていただいた。こちらも慣れない司会であったが、宇井先生の「貫録」に救われたことが忘れられない。原田先生についても書きたいが、次の機会にしよう。

(2014年9月24日)

